

が衰退した。つまり地域における偶然的な出会いの機会が失われたわけである。そうした中で、失ったものを如何にしてとり戻していくかということが大変重要なことと考える。

また職業というものも非常に多様化してきている。昔の農村社会であれば、誰もが自然のリズムに従って生活していたので、日が暮ればいつでも寄合などで集まることができた。しかし現在は工業化社会の中にとり入れられているので、それぞれ生活のリズムが異なり簡単に集まることができない。こうしたことから相互の疎外が発生、それが地域社会にも及んでいる。

そうしたものを1つに結びつけてゆく手段として何が残されているのかということであるが、これこそ私は地域におけるレクリエーションであろうと思っている。コミュニティ・レクリエーションという横文字があるが、地域の人たちが集って如何に楽しくすごすか、その中でコミュニケーションができるか、ということが重要なのである。コミュニティという言葉はコミュニケーションをすることから来ているわけだが、如何にしてそうした単位をつくるかが重要である。

ところで先ほどの八王子市レクリエーション協会のお話によれば、自分たちが色々訓練し練習したものを“まち”という1つの場に持ち出してきている。何事も習い自分で学ばなければ面白くないものであるが、その修得したものを「祭」というハレの場で人に見てもらおうということが、コミュニケーションにつながっている。

私は観光の問題に長く係わってきたが、“観光”という言葉は自分たちの国の光を見せる、自分たちで築いてきた生活文化を他の人に来て見ってもらう、というところから来ている。例えば、先ほど紹介していただいた様々なレクリエーションを“まち”の中にもって来て行なう。そうすると大勢の人が集まる。大勢の人から見てもらうと、人間は本質的に目立ちたがる性質があるので、益々盛んになり、レクリエーション自体の交流活動が活発化する。そうした中で相互の親睦が深まり、またその技術の中に自分自身が錬磨されてゆく。一芸に通じるものは多芸に通じるというが、芸というよりはものの考え方に通じるようになるわけである。したがって1つのことをやることの意味といったものが出てくる。八王子市の場合には、それまでの練習や学習で研鑽してきたものを、祭などのイベントの中に誰もが参加できるようなかたちで持ち込んでいる。

それがまた、自分の能力がどのようなところにあるのかといった、自己実現の一環としてのレクリエーションにもなっている。

人間疎外が進むなかで、本来の人間性を取りもどし、それを人々と分かち合う。そうした交流の楽しみのようなものが求められている。それらが結集され、ひとつの“まち”というものになってゆく。そうすると見る・見られるという関係が生まれ、大会などを開けば遠くから人々が見に来てくる。そうしたところに観光とイベント、地域や文化とレクリエーションの関係があるのではないかと考えている。

レクリエーション社会学の立場から

田中 祥子

余暇階級にある人たちが、その時代の文化をつくり上げてきた、ということがよく言われる。平安時代は貴族の時代であったし、江戸期は町民文化の時代であった。そして現代を考えてみると、もしこのまま余暇活動としてダンスとゲームだけを行うようになったら、百年後に昭和の時代を振り返ったとき、どのような文化が残されているのか、ということをもとに考えた。その昔、ローマは余暇階級がパンとサーカスのみに生きたことによって国が滅びたといわれているほど、余暇を我々がどのように使うかということが、大変重要な問題になっていると私は考えております。

本日の丸山先生のお話をお聞きして、行政を頼りにせず皆さんだけで進めてこられたことは大変すばらしいと思うと同時に、どこの町でも仲々そこまでできることではないと思いました。つまり、私はもう一度行政のあり方を考え直してほしいという提案をしたいわけです。丸山先生が、行政の中にいる限り、活動内容の狭いものになってしまうというお話をされましたが、私はむしろ縦割りの行政組織自体に地域のレクリエーションをマイナスにする要素があるのではないかと考えています。

もう1つは、行政が設置するレクリエーション施設が、例えば婦人会館や老人クラブ、児童館など年齢層に分けた空間になってきているように思われるが、本当は年齢などに関係なく、地域の人がみんな集って様々なかたちでレクリエーションができる施設がほしいわけです。そうすれば、母親が子供を連れてきて、自分のバレーボールをやっている間に、子供のプログラム

が用意されているといった利用が可能となる。勤労青少年会館などといっても、案外利用される時間がちがうので昼間は閑古鳥が鳴いて夜間だけ忙しい。このように施設的にみても地域のレクリエーションは大変なムダをしている。こうした点をもう一度考え直してもらいたいと思います。

それでは好ましい施設はどのようなものかというところ、公民館のようなもの、そして図書館もついている。こうした小さな施設が沢山ほしいと思う。歩いて15分程度の下駄履きで利用できる日常圏のレクリエーション施設を考える必要がある。そうしなければ、花火を上げているような行事型のレクリエーション行政になってしまう。

次に施設の使い方に関しては、現在の学校もさることながら、今後は学校を教育の場としてだけでなく、地域の人が利用できるレクリエーションの場として利用してゆくべきだと考えております。これには長短両面があると思いますが、アメリカでは大変ユニークな利用がなされています。これは、学校の中では先生と生徒という関係があるので、授業が終ると先生方は隣の学校へ移ってしまう。つまり余暇活動の場で係り合う先生と生徒というのは、授業における関係と異っているわけである。リーダーというのは、縦の関係におかれた存在ではなく、援助者としての存在であるから、そういう意味で自分の学校の先生よりは他の学校の先生の方がうまくゆく。このような例もいくつか見られました。

レクリエーションの目標は、究極的には共に生きるということにあると思います。人間には、いわゆる競争人間と協力人間との2種類のタイプがあるように思いますが、競争が精神の荒廃など様々な問題を起こしているように思われます。したがって我々はレクリエーションの中で常に協力人間を生み出すことを目標にやっていきたいと考えています。

体育・スポーツ研究者の立場から

川村 英男

1. 地域・地域社会について

広辞苑によれば「地域」とは「土地の区域・区画された土地」となっているが、物的である。そこで「地域社会」をみると「一定の社会的特徴をもった地域的

範囲の上に成立している集落共同体」となっている。この方が分かり易いし、ここでは「地域社会」として考えることにしたい。

今日、地域社会とよんでいるものを歴史的に遡ってみると、それは集落、村落、ムラとよばれたものであろう。

わが国の場合を概観すると、古代から中世にかけて、集落・村落が形成されたようであるが、その中心には神社（氏神）や寺があった。神の信仰や祖先崇拝がその時代の人々のこころに共通にあった。そして例えば神社の祭礼には集落の人々が総出で参加し、やがてはその祭礼のための組織が生まれ、それが集落の生活にも影響した。そこで行われる種々の芸能的な活動や遊びは、しだいに発達していった。そうしたことが動機となって、その地域社会の生活が向上し、文化とかレクリエーションと呼ばれるような活動が展開し、進歩した。いわば古い時代の文化とかレクリエーション（勿論そういう用語も意識もなかったが）は、地縁と血縁を要因として発達したと考えられよう。

古代ギリシャのポリスもそれぞれ特有の地域社会といえよう。それぞれの祭礼を中心としたポリス人の生活とそこに形成された文化、ポリスの市民たちの生活は、地縁の血縁的な条件のもとに進化したのである。

中世になるとキリスト教がヨーロッパを支配するが、それは今日の教会にその伝統が残っている。大都市におけるシンボリックな教会の建物、地方村落の中心にある教会にそれを見ることが出来る。ヨーロッパの文化、芸術はそうした中から生まれたものである。

ギリシャ文化はその神話と、ヨーロッパ中世の芸術はキリスト教と深いかかわりをもっており、日本の美術は神社とか寺院と密接に結びついて発達した。種々の芸術的・民俗的な文化とかレクリエーション的活動の発生や発達には、そこに要因の1つを見出しうると考えられる。

武家政治の時代になると城下町が発達し、職業や身分による町づくりも生まれ、それに伴ってその町（地域）の生活様式が生まれた。

農山漁村にはまたそれぞれの生活様式や習慣が形成され、山の神、海の神の祭礼が行われ、四季折々の行事、遊びが盛んになる。

徳川時代には、各地の寺社の縁日が盛んになり、そこで催される遊芸、芸能、遊びやスポーツの活動も多くなり、今日に伝わるものも少なくない。（この時代